

得意を活かした自己選択による学級づくりに関する実践

主張

私は、2年生の学級活動(1)学級や学校における生活づくりへの参画において、「自分たちのクラスは自分たちでつくっている」と実感する児童を育てたいと願っている。そのために「自己選択」と「認め合い」の2つを手がかりに活動を展開していく。

自己選択とは、みんなで決めためあてに向かってすべての児童が自分自身の得意なことを活かして、学級の課題解決の方法を選ぶ場を設定することである。認め合いとは、それぞれの児童が自己選択をした活動についてお互いのよさを伝え合う活動である。

これらの活動により、「自分たちのクラスは自分たちでつくっている」と実感する児童になると考える。

1. 研究主題設定の理由

小学校学習指導要領特別活動編における「学級活動(1)ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決」では、「折り合いをつけて集団としての意見をまとめることの大切さ」が述べられている。また、「学級活動(1)イ 学級内の組織づくりや役割の自覚」では、「学級の成員全員が何らかの役割を分担し、学級の一員として、みんなから必要とされている認識をもつこと」の必要性も述べられている。

しかし、昨年度担任していた6年生の学級において、学級全体のめあてを決めて活動をするときに、「みんなでめあてを決めたのに、一定の人ばかりが一生懸命やって、協力してくれない人がいる。」という内容の発言する児童の姿が散見された。このような姿から、高学年という発達段階においても、よりよい合意形成を図るとともに、児童一人一人が「自分たちのクラスをよりよくするために行動しよう」と考えることに難しさを感じた。そこで、学級づくりの初期段階では児童一人一人の「学級のために貢献している」という気持ちや、「自分の学級をもっとよりよくしたい」という気持ちを強くすることから始めたいと考えた。

上記のような問題点を解決するために、手立ての1つ目として、児童が「自分の得意なことを活かして学級の問題を解決しようとする」と取り入れる。このことで、児童一人一人が活動をする際に、自信をもって活動することや、最後まで責任をもって活動することにつながると考えた。この得意を活かした活動は児童が自己選択できるようにしたい。自分で決めることが、学級のために責任をもって最後まで活動する姿につながるからである。また、手立ての2つ目として、一人一人の行動をお互いに認め合う活動を取り入れる。このことで、友だちから認められることで自分の行動に自信をもち、「学級のために貢献することができた」という自己有用感を高めることができると考えた。

この活動によって、低学年という発達段階で、「自分たちのクラスは自分たちでつくることができる」という経験をすることができる。一人一人が自分の得意を活かして学級をよりよくするために活動し、それを認め合う活動を通して、自治的な学級づくりに関わるということを経験する。その経験が中学年や高学年における児童のよりよい集団活動につながると思われる。よりよい集団活動とは、自分にとってもみんなにとってもよいものとなるよう話し合ったり、多様な意見のよさを積極的に生かして合意形成を図ったりすることである。自分たちの手で自分たちの居場所をよりよくしていくことができるという経験が、発達段階が上がっていく上での様々な特別活動の場面に影響するのである。

本活動は、学級力向上プロジェクトの中で取り入れることとする。学級力向上プロジェクトでは、学級の児童が、自分の学級についてのアンケート項目に回答すると、その結果がレーダーチャートとなって表れ、それをもとに話し合いをしたり、めあてを決めたりして、教師と児童が協力して学級づくりに取り組むことができる。私が今年度担当している2年生において、学級の問題を話し合う時に、数値化されたレーダーチャートをもとにすることで話し合いが活発になると考える。学級力向上プロジェクトにおいて、学級をよりよくしていくことを目的に活動をしていく。

2. 研究内容

(1) 研究仮説

みんなで決めためあてに向かって、自分自身の得意なことを活かして学級の課題解決の方法を選ぶことで、「自分は学級に貢献している」という実感につながる。さらに、自己選択した活動について、お互いのよさを伝え合う活動をすることで、「自分たちのクラスは自分たちでつくっている」と実感できる児童が増えるだろう。

(2) 研究の方法

- ・対象：新潟市立竹尾小学校 2年1組
- ・期間：令和5年4月～7月
- ・検証方法：実践前後の児童のアンケート調査と児童の振り返りの記述をもとに考察

(3) 指導要領上の取り扱いについて

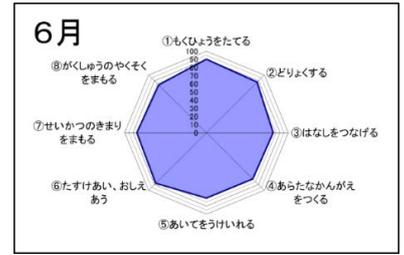
学級活動「(1)学級や学校における生活づくりへの参画」
ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決
イ 学級内の組織づくりや役割の自覚

本実践の研究は、「小学校学習指導要領 特別活動編」の上記の内容を中心的に実践する。

3. 研究の実際

○学級力アンケートの結果から話し合いをし、めあてを決めるまでの流れについて

4月後半より、昨年度から学校で実施していた学級力向上プロジェクトを今年度も続けて進めていくことを伝えた。「自分たちの学級は自分たちでつくってほしい」という教師の思いも伝えた。めあてをたてて行動に移すと、6月中旬にとった学級力の数値（右データ）をあげることができ、点数が上がり学級がよりよくなっていることに子どもたちは素直に喜んだ。



6月のデータから、次はどんなことを学級全体で努力していくか話し合わせた。子どもたちの声を聞くと、「⑤が下がったから、そこをがんばりたい。」「⑧がまだひくいからもっとがんばったほうがいいよ。」や「次は90点をこえるものをもっと増やしたい。」などと、様々な意見が出され、なかなか学級全体の思いを集約することができなかつた。以下、授業での教師と子どもとのやりとりの様子である。

T「意見がバラバラでめあてが決められないなら、無理に決めなくてもいいよ。」

C「そんなことしていいの？今まではめあてを一つに決めていました。」

T「クラスをもっとよくしていきたい気持ちはみんな一緒でしょ。」

C「たしかに。でもめあてはどうすればいいのかな。」

T「全体的に点数が同じくらいだから、一人一人が自分のできることをやって、上げたいところを上げていくのはどう？」

C「それができるならそれがいいです。」

T「じゃあ、7月のめあてを決めましょう。」

C「【一人一人ができることをして、クラスをもっとよりよくしよう】にします。」

このようにして、7月のめあてを設定した。

(1) 得意を活かして個人のめあてを自己選択する手立て

学級をよりよくしようとするめあてに向かって、自分ができることを選択するために、「学級力アップカード」を作成した。このカードには、まず学級力の数値の8つの中で、児童自身が点数を上げたい項目を1つ選び記入する（左上）。ここは数値の高い低いに関係なく選択することができる。学級のことを考えて、数値をさらに高くしたいと思ったところを選んでほしいと児童に伝えた。

次に、自分の得意なこと、好きなことを記入する（右上）。得意なことや好きなことを活かすのは、どの集団においても、自分の長所を活かして、その集団をよくしていける力を児童につけたいという教師の思いからである。

その2つから、自分が1週間間に学級のためにできそうな行動を考え、記入する（下部）。子どもたちは、自分の得意なことを活かして学級力を高めるために自分がどんなことができるかを考え、行動を選択していった。これを1週間に1回のペースで3週間にわたって行った。

児童がどのようなことを記述したのかについては、次の表にいくつか児童の例を示すこととする。

自分が学級力を上げたいところ（左上）	自分が得意なこと・好きなこと（右上）	自分がクラスのためにできること（下部）
①目標をたてる	みんなの前で発表すること	朝の会で今日の目標を発表する。
①目標をたてる	手をあげて発表すること	みんなからのお知らせをする時間に「図書バッグを明日持ってきてきましょう」とお知らせする。
③話をつなげる	大きな声で発表すること	授業で誰かが意見を言ったら、それにつなげて自分も話をつなげるようにがんばる。
③話をつなげる	友だちとお話すること	授業中に隣の人が質問したら、その話にのる。
⑤相手を受け入れる	友だちに優しくすること	授業のときに、友だちが意見を言ったら「いいね」と言う。
⑥助け合い、教え合う	友だちを助けること	友だちが困っていたら、「どうしたの？」と声をかける。
⑦生活の決まりをまもる	友だちに優しくすること	廊下を走っている友だちがいたら、優しく声をかける。
⑧学習の約束を守る	友だちとなかよくすごすこと	友だちにさわらないようにすごす。
⑧学習の約束を守る	絵をかくこと	授業中に立ち歩かないようにポスターをかく。

<抽出児童の女子Aについて>

A子は、3回の学級力アップカードの作成で、すべて「⑦生活の決まりを守る」を選択し、すべて「ポスターを作成する」という行動を選択している。実際には1回目に右のような学級力アップカードを作成した。作成したポスターは、教室内に掲示した。A子は、「ろうかを走らないことを伝えるポスターの作成」を2回、「授業中に立ち歩かないことを伝えるポスターの作成」を1回行っている。どれもA子が学級力の項目から、「⑦生活の決まりをまもる」を選択した結果である。

(2) 自己選択した行動を認め合う手立て

お互いにロイロノートで手紙を送り合う活動を取り入れた。学級力アップカードを作成した後、名簿番号が書いてある紙を引き、引いた番号（名簿）の友だちが1週間どんな行動をして学級をよりよくしようとしているかを見ることとした。学級力アップカードは提出させた後、回答共有をし、いつでも子どもたちがお互いのカードを確認できるようにしたこと、担当になった友だちがその1週間での行動を知ることができるようにした。また、自分が誰の行動を見ているかは、手紙を送るときまでは開示しない約束とし、「誰に見られているかわからない」というワクワクした気持ちをもちながら、1週間で楽しみながら活動しつつも、責任をもってやりきることができるようにした。手紙はその週の金曜日書き、その後、次の週の自分の学級力アップカードを作成した。

〇〇さんへ
 ちょうしつてはいた
 いポスターをつくら
 いました。おかげでちょう
 してみんなはしあつた
 よ。

<抽出児童の男子 B について>

B 男は、学級力アップカード作成の1週目で「⑤相手を受け入れる」を選択し、学級のためにする行動は、「授業で友だちが意見を言ったらいねと言う」という行動を選択している。B 男は、その選択した行動の通り、授業中に友だちの意見に対し、「いいね!」と元氣よく言って賞賛していた。そして、認め合う活動では、手紙をもらう時には右にあるように、「2の1のためにできることをしてくれてありがとう」という手紙をもらうことができた（右掲）。この手紙をもらった B 男は、手紙を読んでとても嬉しそうな表情を浮かべていた。

〇〇さんへ
 じぎょうちゅうだれかが、いけんをい
 ったときいいねって言ってたね。じぶ
 んが2の1のためにできることをし
 してくれてありがとう。

4. 考察

(1) 研究仮説について

本実践の前後で児童にアンケートをとったところ、次のような結果となった。まずは、「自分たちのクラスは自分たちでつくっていると思うか」についてである。

・自分たちのクラスは自分たちでつくっていると思いますか？		そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
	実践前	60.7	35.7	3.6	0
実践後	88.5	11.5	0	0	

この結果を見ると、実践前後で比較して、「そう思う」と一番肯定的な評価をしている児童の割合が27.8%増加している。また、「あまりそう思わない」と思う児童については、0%となり、「まあまあそう思う」の回答も含めると、「自分たちのクラスは自分たちでつくっている」という実感について、学級全体が肯定的な評価をしていることになる。

また、「自分は2年1組のために役に立っていると思うか」については次のような数値となった。

・じぶんは2年1組のためにやくに立っていると思いますか？		そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
	実践前	21.4	53.6	14.3	10.7
実践後	73.1	26.9	0	0	

この結果からも、「自分が学級をさらによくしていくことに、関わる事ができている」という児童の自己有用感の高まりを読み取ることが出来る。ここでも「思わない」と否定的な回答をする児童は0%になっている。

さらに、「2年1組のことは好きか」という質問については、次のような数値となった。

・2年1組のことは好きですか？		好き	まあまあ 好き	あまり好き じゃない	まったく好き じゃない
	実践前	32.1	64.3	3.6	0
実践後	92.3	7.7	0	0	

この結果からは、児童の学級への愛着の高まりを読み取ることが出来る。特に、自信をもって「好き」と答える児童の割合が9割を超えていることに大きな変化を感じる。

これらのデータから、まず学級力アップカードの作成によって、児童が自分の得意を活かして学級をよりよくするためにできる行動をしたことで、児童一人一人が「自分が学級をよりよくすることに貢献している」という実感をもつことができたということがわかる。また、一人一人の行動をお互いに認め合う活動を取り入れたことで、自分たちの行動をお互いに児童同士で価値づけることにつながり、学級の中に温かい風土をつくりあげることができた。そのように自分たちの学級を自分たちで居心地の良い場所にできたからこそ、「自分の学級が好きだ」と多くの児童が回答することにつながった。

そして、本実践では、研究仮説において狙っていた通り、「自分たちのクラスは自分たちでつくっている」と実感できる児童を増やすことができた。それは、手立て①の自己選択によって、児童一人一人がクラスをよりよくするためにできることを選び行動したことと、手立て②の認め合いによって、自己選択した行動を価値づけたことによると考えられる。

(2) 抽出児童の様子

○女子児童 A：「学級力アップカード」について

A 子は、児童アンケート「自分たちのクラスは自分たちでつくっていると思いますか。」に対し、実践前は「あまりそう思わない」と回答していたが、実践後は「そう思う」と回答している。実践後の振り返りでは、「(7月の結果が)2こ100点にあってうれしいです。ぜんぶ90点より上だったのでうれしいです。」と書いている。自分が学級のために「ポスターを作成する」という行動を選択したことが、学級をよりよくすることにつながったと実感できているのではないかと読み取ることができる。ここからも、「学級力アップカード」を作成することが、「自分たちの学級は自分たちでつくっている」という児童の実感につながると考えられる。

○男子児童 B：お互いの行動を認め合う活動について

男児 B 男は、児童アンケート「やっていることを友だちから認められて、うれしいと感じることがありますか。」に対し、実践前は「あまりない」と回答していたが、実践後は「ある」と回答している。実際に活動の中で友だちから手紙をもらい読んでいるときにも、嬉しそうな表情を浮かべていた。さらに、実践後の振り返りでは、「とてもうれしいし、学級力があがってよかった。みんなもうれしいし、たのしいからよかった。」と書いている。お互いの活動を認め合うことが、嬉しいと感じ、学級力をあげることにつながっていることを実感していると読み取ることができる。

(3) 実践の副次的な効果

本実践によって、児童に副次的な良い効果をもたらしたと考えられることがある。

「あなたはやると決めたことを最後までやりきることができるか」という質問では次の数値となった。

・あなたはやると決めたことを最後までやりきることができますか？		そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
	実践前	60.7	32.1	7.1	0
	実践後	76.9	23.1	0	0

この数値を見ると、実践後には、「あまりそう思わない」と答える児童が0%となり、「そう思う」と肯定的に答える児童が、16.9%増加している。学級力アップカードの作成によって、自分の行動を自己選択したことにより、自分の行動を最後までやりきることができる児童が増えたと考えられる。

また「友だちのよいところやがんばっているところを見つけて励ましているか」という質問では次の数値が出た。

・友だちのよいところや、がんばっているところを見つけて励ましていますか。		している	まあまあ いている	あまりして いない	まったく していない
	実践前	32.1	46.4	17.9	3.6
	実践後	80.8	19.2	3.9	0

この数値から、「友だちのよいところを認める経験」が増えていることが読み取れる。実際の児童の様子を見ても、手紙を送り合ったり、それを読んだりする時間は、嬉しそうな表情を浮かべる児童が多くいた。お互いに認め合い、価値づけ合うことで、学級に温かい風土が生まれた。もちろん教師から認められることも必要だと思うが、児童同士で認め合うという活動もまた、学校生活において重要であると考えられる。

さらに、「自分にはよいところがあると思うか」という質問では次の数値となった。

・自分にはよいところがあると思いますか？		そう思う	まあまあそ う思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
	実践前	46.4	39.3	14.3	0
	実践後	92.3	7.7	0	0

これを見ると、自信をもって「そう思う」と答える児童の割合が実践後に約2倍となっている。

「学級力アップカード」に得意なことを書くことで自分の得意なこと・よいところを意識的に自覚するようになり、さらにそれをお互いに認め合う活動を取り入れたことで、活動前よりも自分の良さに目が向くようになったと考える。

これらのことから、手立て①の自己選択と手立て②の認め合いという活動をすることが、「最後までやりきる責任感」「友達よさを見つける経験」「自分のよさの自覚」につながったと考えられる。

5. 研究の成果と課題

○成果

学級づくりの入門期において、児童の学級への愛着や学級の温かい風土が高まっていない時に、児童が自分の得意を活かして学級の課題の解決方法を自己選択する場を設定したことで、児童の「自分は学級に貢献している」という実感が生まれる。また、児童が自己選択をした行動を、お互いに認め合う場を設定すると、お互いに価値づけし合うことになり、「自分たちのクラスは自分たちでつくっている」と実感できる児童を増やすことができた。また、この活動により、児童の「責任感」や「友達よさを見つける経験」、「自分のよいところへの自覚」を生み出すことができた。

○課題

学級力アップカードをなかなかうまく作成できない児童がいた。例えば、自分が学級力を上げたいところを選択できたとしても、その部分と自分の「得意なこと・好きなこと」を結び付けて「学級のためにできること」を考えることができない児童がいた。そのような児童は、「得意なこと・好きなこと」は無理に書かず、空欄にして、「学級のためにできること」を書くように支援した。

また、よりよい合意形成を図るための活動であるかは、さらなる実践の余地があるので、引き続き実践を行いながら明らかにしていきたい。

6. 参考文献

・文部科学省(2017)小学校学習指導要領 特別活動編